世界遺産としての価値

戦わない城の意義を、世界に発信

～彦根城を見れば、江戸時代が分かる～

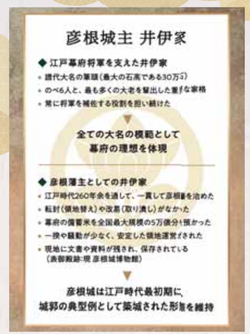
彦根城は、一度も戦闘を経験していない城郭です。
江戸時代、彦根藩の武士たちはその城郭に集まり、領地の安定のため、大名とともに政治に取り組み、また、必要となる文化活動や武芸に励みました。
やがて、その城は、安定と調和のシンボルとして、なくてはならない景観となったのです。

象徴的な外観

遠くからでも見えるようにつくられました。将軍と同じ城の形が、将軍に認められたことを表現しています。

❶ 天守（国宝） 城の中心にそびえるシンボル。大きな飾り屋根を複雑に組み合わせたデザインは、遠くからでもよく見えるための工夫です。

「城」は天守だけを指すのではありません。特別史跡である彦根城跡は、およそ中堀の内側全体を城としています。



❷ 佐和口 さわぐち

中堀に面し、彦根城の表門に通じる重要な入口でした。堀、石垣、櫓による象徴的な外観がよく見てとれる場所です。

❸ 表御殿跡

藩主の住まいで、政治の方針決定や儀式をするところです。彦根城博物館の地下に遺構が保存されています。

集約的配置による空間の完結性

政治や儀礼のための機能が集約して配置され、石垣や櫓、堀で区切られました。内側が特別な空間であるということを表現しています。

❹ 埋木舎 うもれぎのや

藩主の跡継ぎ以外の男子を育てる屋敷で、井伊直弼が暮らしたところです。屋敷全体の建物や庭が当時のまま残っています。

❺ 槻御殿 けやきごてん

表御殿に次ぐ2番目の御殿です。江戸時代の建物が残っている御殿は、全国でもわずかしかなく貴重です。

❻ 重臣屋敷跡

天守と御殿を取り囲む形で、藩主とともに政治を担った重臣たちの屋敷が配置されました。旧西郷屋敷長屋門（写真）は、現存する全国の長屋門の中でも最大級です。

中堀の内側と埋木舎が世界遺産に登録しようとしている「彦根城」の範囲です。

❼ 玄宮園 げんきゅうえん

江戸時代の絵図のままの景色が残る大名庭園です。美しい景色を楽しむだけでなく、藩主と家臣が和歌、茶の湯、武芸などを実践するところでした。

❽ 表御殿能舞台

能は儀式のときに上演され、藩主と家臣がともに鑑賞しました。本物の能舞台が城の中に残っているのは、全国で彦根城だけです。

彦根城を守り伝えるために

伝統文化の継承

写真は彦根城博物館わくわく体験スクールの様子

茶道

江戸時代の武士たちにとって、茶道は、重要な教養でした。中でも、井伊直弼公は茶道を極め、石州流の中に一派を立ち上げました。その著書「茶湯一会集」の序文に記された「一期一会」。現在も多くの場面で引用されるこの言葉は、茶道を通した直弼公の理想を伝えています。

田植え

玄宮園の中には、小さな田んぼがあります。農村の景色を再現し、藩主自ら田植え、稲刈りを行い、農民の苦労を知り、五穀豊穣を願う、大切な行事の舞台でした。明治以降、長らく荒れ果てていましたが、2012年に復元整備が行われ、以降、市民の有志を募り、田植え、稲刈りが復活しました。市民みんなで、豊かな実りに感謝しています。

「年都婆小町」大槻 文蔵（人間国宝）

能・狂言

能は、江戸幕府の式楽（公的な儀式で行う芸能）です。幕府が様々な儀式で能を上演したため、各地の藩もこれにならって能を行い、能役者を召し抱えました。また、城の中に能舞台がつくられることもありました。彦根城博物館内に残る能舞台は、今でも現役で使われ、能の上演が行われています。

地域のさまざまな取組

ボランティアガイドの活動

彦根城を訪れるお客様に見どころを解説、天守などの建造物ほか、石段のつくり方など城づくりの技術を活かしながら、260年間平和な時代が続いたことの素晴らしさを伝えています。

世代間学習

彦根商工会議所青則課長　滋賀県立大学「世界遺産のまちづくり人づくり」の様子

城下町にある小学校の児童と大学生が、一緒に彦根城の世界遺産登録のために自分たちができることを話し合うなど、世代を超えたつながりが広がっています。

市民参加の写生大会

公益社団法人彦根青年会議所主催 2022年彦根城写生大会「写そう!見み出そう!このまちの未来」の様子

毎年、多くの市民が参加し、彦根城写生大会が開催されています。約60年続いており、小さな子どもからお年寄りまで、家族やグループみんなで彦根城に親しむ機会となっています。

※2022年の作品を表紙で紹介しています。

●江戸時代の政治体制が城という形に表れるまで

	戦国時代／安土桃山時代	大名の家臣も、自らの領地と城を持っていた。	
1600	関ヶ原の戦い	戦いに敗れた西軍の武将の領地に、勝利した東軍の武将が配置される（各地に藩がつくられ始める）。	井伊直政も石田三成の領地であった彦根の地を拝領した。
1603	徳川家康が征夷大将軍になる（江戸幕府の設立）	各藩の拠点として、新しい城郭が建造される。特に重要なものは、幕府の直轄の命令で、たくさんの大名を動員してつくられることにより、徳川スタイルの城郭が全国に広まる。	1606年から、彦根城も多くの大名の手によりつくられた。（手伝普請）。
1615	大坂夏の陣／豊臣氏が滅びる 一国一城令 武家諸法度の制定	幕府による大名の統制が始まる。 現則として、1つの藩の領地につき、城郭は1つだけになる。大名の家臣は自分の城郭を持てなくなった。 幕府の命令がなければ藩の軍事力を動かすことができなくなる。各地の大名は軍事発動権を失う。城郭の修理には幕府の許可が必要となったため、城郭の基本的構造が変わることがなくなった。	これらにより、城郭は実質的な軍事機能を失う。 城郭は、軍事力を誇示するものではなく、幕府の強力器を示す権力の象徴となる。
1635	参勤交代の制	全ての大名が年ごとに江戸と国元を行き来することにより、大名は幕府の組織体制と統治の仕組みを学び、藩の政治に取り入れた。また、幕府で将軍から大名に行われる儀礼を、国元でも大名から家臣に向けて行い、上下の秩序や政治理念を共有した。	城郭の中に大名の御殿と重臣屋敷が集約的に配置され、大名庭園や能舞台などの儀礼空間が設けられた。

江戸時代には、藩の統治拠点である城郭が全国に約150築かれましたが、そのほとんどは、19世紀後半に日本の政治体制が転換して役割を終えた後、取り壊されました。その中で、彦根城は、住民の強い願いによって例外的に保存されることになり、その後も戦災や開発などで失われることがなかったため、彦根藩の政治の中心地として、領地をおさめるための政治の仕組みを示す建造物や遺構が最も多く、良い状態で保存されています。

世界遺産としての価値

戦わない城の意義を、世界に発信

～彦根城を見れば、江戸時代が分かる～

彦根城は、一度も戦闘を経験していない城郭です。
江戸時代、彦根藩の武士たちはその城郭に集まり、領地の安定のため、大名とともに政治に取り組み、また、必要となる文化活動や武芸に励みました。
やがて、その城は、安定と調和のシンボルとして、なくてはならない景観となったのです。

象徴的な外観

遠くからでも見えるようにつくられました。将軍と同じ城の形が、将軍に認められたことを表現しています。

❶ 天守（国宝）

城の中心にそびえるシンボル。大きな飾り屋根を複雑に組み合わせたデザインは、遠くからでもよく見えるための工夫です。

「城」は天守だけを指すのではありません。特別史跡である彦根城跡は、およそ中堀の内側全体を城としています。

●江戸時代の政治体制が城という形に表れるまで

	戦国時代／安土桃山時代	大名の家臣も、自らの領地と城を持っていた。	
1600	関ヶ原の戦い	戦いに敗れた西軍の武将の領地に、勝利した東軍の武将が配置される（各地に藩がつくられ始める）。	井伊直政も石田三成の領地であった彦根の地を拝領した。
1603	徳川家康が征夷大将軍になる（江戸幕府の設立）	各藩の拠点として、新しい城郭が建造される。特に重要なものは、幕府の直接の命令で、たくさんの大名を動員してつくられることにより、徳川スタイルの城郭が全国に広まる。	1604年から、彦根城も多くの大名の手によりつくられた。（手伝普請）。
1615	大坂夏の陣／豊臣氏が滅びる 一国一城令 武家諸法度の制定	幕府による大名の統制が始まる。 原則として、1つの藩の領地につき、城郭は1つだけになる。大名の家臣は自分の城郭を持てなくなった。 幕府の命令がなければ藩の軍事力を動かすことができなくなる。各地の大名は軍事発動権を失う。城郭の修理には幕府の許可が必要となったため、城郭の基本的構造が変わることがなくなった。	これらにより、城郭は実質的な軍事機能を失う。城郭は、軍事力を誇示するものではなく、幕府の後ろ盾を示す権力の象徴となる。
1635	参勤交代の制	全ての大名が1年ごとに江戸と国元を行き来することにより、大名は幕府の組織体制と統治の仕組みを学び、藩の政治に取り入れた。また、幕府で将軍から大名に行われる儀礼を、国元でも大名から家臣に向けて行い、上下の秩序や政治理念を共有した。	城郭の中に大名の御殿と重臣屋敷が集約的に配置され、大名庭園や能舞台などの儀礼空間が設けられた。

彦根城主 井伊家

◆ 江戸幕府将軍を支えた井伊家

- 譜代大名の筆頭（最大の石高である30万石）
- のべ6人と、最も多くの大老を輩出した重要な家格
- 常に将軍を補佐する役割を担い続けた

▼

全ての大名の模範として
幕府の理想を体現

◆ 彦根藩主としての井伊家

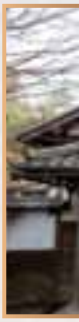
- 江戸時代260年余を通して、一貫して彦根藩を治めた
- 転封（領地替え）や改易（取り潰し）がなかった
- 幕府の備蓄米を全国最大規模の5万俵分を預かった
- 一揆や騒動が少なく、安定した領地運営がされた
- 現地に文書や資料が残され、保存されている（表御殿跡：現 彦根城博物館）

▼

彦根城は江戸時代最初期に、
城郭の典型例として築城された形態を維持

❸ 表御殿跡

藩主の住まいで、政治の方針決定や儀式をするところです。彦根城博物館の地下に遺構が保存されています。



❹

藩主の
井伊直
の建物

❷ 佐和口 さわぐち

中堀に面し、彦根城の表門に通じる重要な入口でした。堀、石垣、櫓による象徴的な外観がよく見てとれる場所です。

江戸時代には、藩の統治拠点である城郭が全国に約150築かれましたが、そのほとんどは、19世紀後半に日本の政治体制が転換して役割を終えた後、取り壊されました。その中で、彦根城は、住民の強い願いによって例外的に保存されることになり、その後も戦災や開発などで失われることがなかったため、彦根藩の政治の中心地として、領地をおさめるための政治の仕組みを示す建造物や遺構が最も多く、良い状態で保存されています。

集約的配置による空間の完結性

政治や儀礼のための機能が集約して配置され、石垣や櫓、堀で区切られました。内側が特別な空間であるということを表現しています。

埋木舎 うもれぎのや

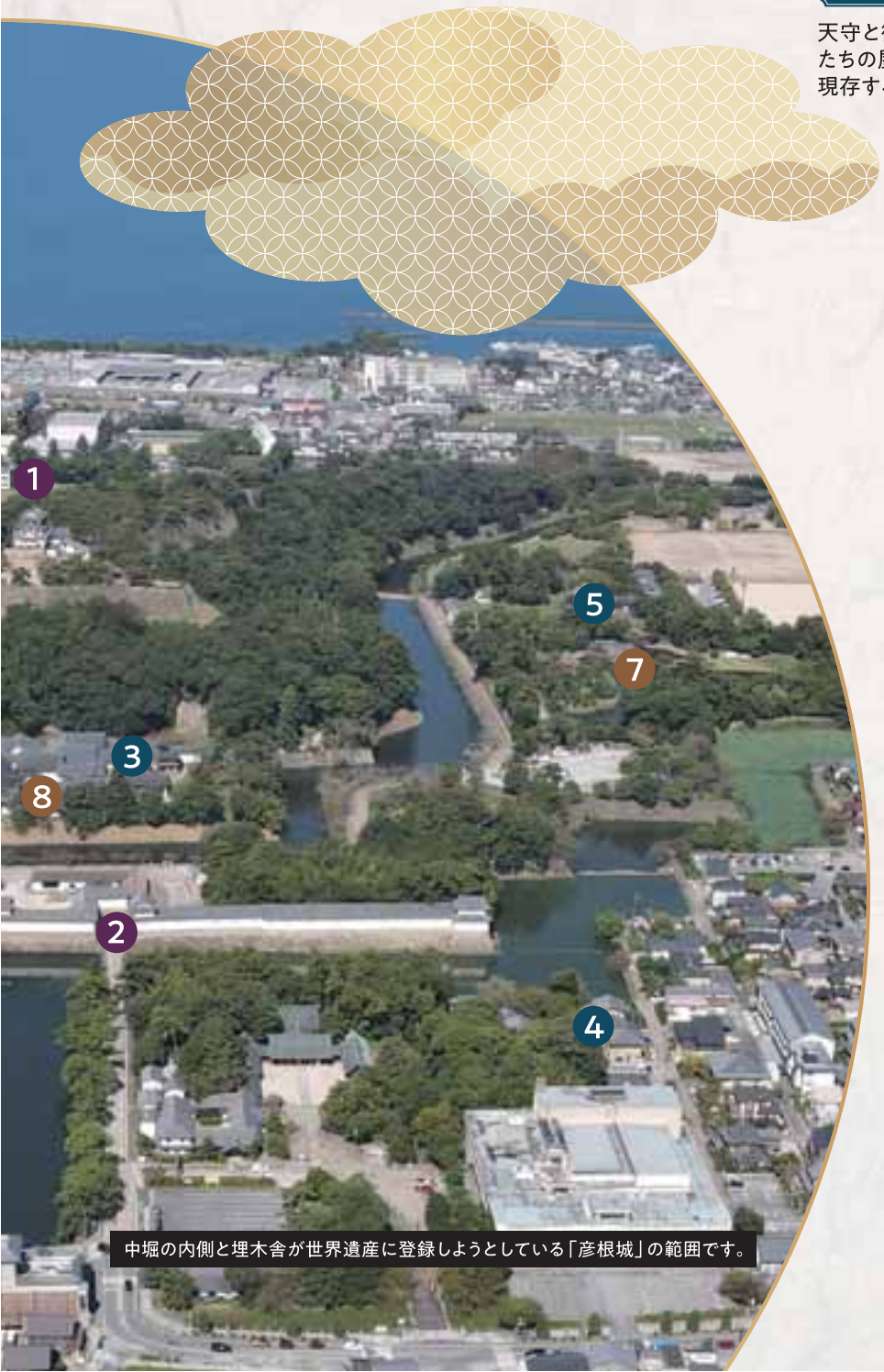
跡継ぎ以外の男子を育てる屋敷で、弼が暮らしたところです。屋敷全体や庭が当時のまま残っています。

❺ 槻御殿 けやきごでん

表御殿に次ぐ2番目の御殿です。江戸時代の建物が残っている御殿は、全国でもわずかしかなく貴重です。

❻ 重臣屋敷跡

天守と御殿を取り囲む形で、藩主とともに政治を担った重臣たちの屋敷が配置されました。旧西郷屋敷長屋門（写真）は、現存する全国の長屋門の中でも最大級です。



中堀の内側と埋木舎が世界遺産に登録しようとしている「彦根城」の範囲です。

❼ 玄宮園 げんきゅうえん

江戸時代の絵図のままの景色が残る大名庭園です。美しい景色を楽しむだけでなく、藩主と家臣が和歌、茶の湯、武芸などを実践するところでした。

❽ 表御殿能舞台

能は儀式のときに上演され、藩主と家臣がともに鑑賞しました。本物の能舞台が城の中に残っているのは、全国で彦根城だけです。

彦根城を守り伝えるために

伝統文化の継承

写真は彦根城博物館わくわく体験スクールの様子

茶道

江戸時代の武士たちにとって、茶道は、重要な教養でした。中でも、井伊直弼公は茶道を極め、石州流の中に一派を立ち上げました。その著書「茶湯一会集」の序文に記された「一期一会」。現在も多くの場面で引用されるこの言葉は、茶道を通した直弼公の理想を伝えています。

田植え

玄宮園の中には、小さな田んぼがあります。農村の景色を再現し、藩主自らが田植え、稲刈りを行い、農民の苦労を知り、五穀豊穣を願う、大切な行事の舞台でした。明治以降、長らく荒れ果てていましたが、2012年に復元整備が行われ、以降、市民の有志を募り、田植え、稲刈りが復活しました。市民みんなで、豊かな実りに感謝しています。

「卒都婆小町」大槻 文藏（人間国宝）

能・狂言

能は、江戸幕府の式楽（公的な儀式で行う芸能）です。幕府が様々な儀式で能を上演したため、各地の藩もこれにならって能を行い、能役者を召し抱えました。また、城の中に能舞台がつくられることもありました。彦根城博物館内に残る能舞台は、今でも現役で使われ、能の上演が行われています。

地域のさまざまな取組

ボランティアガイドの活動

彦根城を訪れるお客様に見どころを解説。天守などの建造物ほか、石段のつくり方など城づくりの技術を活かしながら、260年間平和な時代が続いたことの素晴らしさを伝えています。

世代間学習

彦根商工会議所寄附講座　滋賀県立大学「世界遺産のまちづくり・人づくり」の様子

城下町にある小学校の児童と大学生が、一緒に彦根城の世界遺産登録のために自分たちができることを話し合うなど、世代を超えたつながりが広がっています。

市民参加の写生大会

公益社団法人彦根青年会議所主催 2022年彦根城写生大会「写そう生み出そうこのまちの未来」の様子

毎年、多くの市民が参加し、彦根城写生大会が開催されています。約60年続いており、小さな子どもからお年寄りまで、家族やグループみんなで彦根城に親しむ機会となっています。

※2022年の作品を表紙で紹介しています。